

2020/12/20 クリスマス礼拝
ヨハネの福音書 講解メッセージ⑳
『クリスマスの意味』 ヨハネ 9:24-41

生まれつき目の見えない人が、イエス様によって見えるようになりました。ところが、それを怪しんだ人々が、彼をパリサイ人のところに連れて行きました。パリサイ人たちは、本人や両親を呼んで問いただしましたが、イエス様が病をいやすことがどうしても理解できず、信じることができません。そこで、再び本人を呼び出しました。

■ 罪人とは

「そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰さない。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」」（ヨハネ 9:24）

パリサイ人たちは、何を根拠にイエス様が罪人であると言ったのでしょうか。それは、イエス様が彼の目をいやしたのが安息日だったからです。彼らは、イエス様が安息日を守らなかったことが許せなかったのです。

イエス様は、何曜日だろうと、困っている人がいたら助けるのが当然だろうと言われました。しかし、彼らにはそれが理解できませんでした。定められた規定に違反することは、どんな理由があろうと罪だと判断したのです。

私たちもパリサイ人と同じような判断基準で、人の行いを見ていないでしょうか。しかし、それはこの世界の見方であって、神様が罪を判断する基準ではありません。神様の判断基準は、神のことばを信じるか信じないかだけです。イエス様は、神のわざを行うために必要なことは、神が遣わした者を信じることだと言われました。信じれば救われるし、信じなければそのまま滅びます。

■ 人は事実を認識できない

「彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」そこで彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」彼は答えた。「もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」」（ヨハネ 9:25-27）

パリサイ人は何度も同じ事を聞いてきました。そのため、目の見えなかった人は、「あなたがたは、話しても聞いてくれませんでした」と言っています。これは、他人ごとではありま

せん。人というものは、他の人が何と言っても、自分が聞きたいようにしか聞きません。自分が言ってほしいことばを言ってもらえるまで、何度も同じ質問を繰り返すのです。これは、私たちにとって大きな問題点です。

たとえば、自分はだめな者だというセルフイメージを持っている人は、何を言われても自分はダメだという結論に持っていかうとします。誰かに言われた言葉によってつらいのではなく、自分でそのように受け取るために苦しくなるのですが、誰もなかなかこのからくり気づきません。

人は自分の聞きたいようしか聞けないということは、私たちは、真実なものを認識できないということです。私たちが認識できることは、その人の主観であって、真実ではないのです。

「彼らは彼をののしって言った。「おまえもあの者の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らないのだ。」（ヨハネ 9:28-29）

パリサイ人たちは、自分の期待した答えが返ってこないで、怒り、相手をののしり、自分の肩書を誇りました。肩書を誇るのは、不安の表れです。自分が何者なのか、わかっていないということです。そして、人が争うのは、自分の真実な姿を認識していないからです。

もし私が三角形を指して、「これは四角です」と言ったらどうするでしょうか。怒って争いになりますか。多くの方は、「おかしなことを言っている」と笑うだけです。それは、「これは四角ではない」と、真実を知っているからです。つまり、人の言葉に腹を立てるのは、自分の真実な姿を知らないからなのです。

争いは真実を知らないために起こります。自分を知らず、自分で自分を証明することができないので、人の言葉で自分を証明しようとするため、自分が期待した答えを言ってくれないと怒るのです。つまり、怒るのは相手の問題ではなく、自分の問題だということです。

■ 神がいなければ成立しないことがある

「彼は答えて言った。「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、昔から聞いたこともありません。もしあの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできないはずですよ。」（ヨハネ 9:30-33）

この青年は、「私が見えるようになったという事実は、あの方が神から出たとしか言いようがない」、つまり「あの方が神であるということを前提としなければ、この話は成立しない」

と言っています。この世界には、神がおられることを前提としなければ説明がつかないことがあると、私たちは知る必要があります。

たとえば、良心というものがあります。これは、悪いことをする自分を責めるものであり、自分にとっては都合の悪いものです。人というものは、自分にとって都合のいいものしか取り入れようとしません。それなのに、誰もが良心を持っているという事実は、私たちの中に神がおられるのでなければ説明がつかないものなのです。それは、私たちひとりひとりに神のいのちが分け与えられていて、心に神の律法が書き込まれているからだと言っています。

また、神を信じない人であっても「最高」「絶対」「完全」という言葉を使います。これらは「究極」を表すものであり、哲学で「究極」とは「神」を表す言葉です。人は無限や究極という言葉を知っていても、それを体験することはできません。にもかかわらず、人がこのような言葉を使うのは、神を知っているからです。形こそ違っても、誰もが上を目指し、夢を描き、究極を目指して生きています。この世界は究極なものとの統一を目指して運動していると言われます。それは、神がわたしたちと一つになろうとしておられるからです。

このように、人は潜在的に神を知っているのですが、神を認識することができないため、一人一人自分のイメージで想像を膨らませます。その結果、聖書が教えている神が、自分が想像していた神と違うので、文句をつけるのです。

バベルの塔は、人間の力で神に到達しようとして、神に退けられました。神のことは神に聞かなくてはわかりません。神に行き着く唯一の方法は信仰です。信仰を働かせなければ、神が認識できないので、信仰を持たない人は神などいないと言うのです。

人が上を目指すのも、夢を描くのも、自分では気づかないうちに神を求めているからです。神と一つになろうとするから、人類は一つになろうとして、平和を求めるのです。それは、私たちの中に神がおられて、神が運動しているからです。私たちの行動は、神を前提にしないと、まったく説明が付きません。

「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」

(ヨハネ 17:21)

三位一体の神は一つです。そして、この「一つになること」を「愛」と言います。神は私たちの中でこの一つになろうとする運動を展開しておられます。しかし、どんなに頑張っても自分の力で神に到達することはできず、むなしさしか残りません。

神に近づくただ一つの道は信仰です。重荷を下ろして、ただ神の言葉を信じて一つになることが、神が私たちの中で展開している運動なのです。

■ あなたは人の子を信じるか

「彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」」（ヨハネ 9:34-35）

「あなたは人の子を信じますか」。この問いかけこそ、神がすべての人に問うていることです。「人の子」とは、ダニエル書で預言されている、この地上に来て神の国を成就する神を表す言葉です。イエス様は彼に「あなたは神を信じますか」と問われたのです。

「その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がおの方を信じることができますように。」イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。」（ヨハネ 9:36-38）

彼はイエス様に、「私も信じたい」と憐れみを求めました。彼は、「信じるができるように助けてください」と応答し、「信じます」と告白し、イエス様を礼拝しました。これがクリスマスの本当の意味なのです。この時彼は、初めて見えるようになったのです。本当に目が見えるようになるとは、イエス様が救い主であると見えるようになることです。

物理的な幸せではなく、本当の心の目を開いて、メシヤを信じるができるようになることが、イエス様がこの地上にいられたクリスマスの目的です。

自分で自分を見ると罪人でどうしようもないと思うかもしれませんが、神は、あなたのことを「私の目には高価で尊い」と言われます。それこそあなたの真実な姿です。本当のあなたは、無条件で愛される存在なのです。

それを信じることができれば、人からなんとと言われても、怒ったり落ち込んだりすることはなくなります。イエス様の言葉を信じるのが平和をもたらしてくれるのです。これがイエス・キリストを信じるということであり、クリスマスの本当の意味です。

■ 見えない者が見えるようになる

「そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

（ヨハネ 9:39）

「目が見えない者」とは、自分の弱さを知る者です。そういう人は、キリストを信じるようになります。あなたは、キリストを信じたいと願いますか。おぼれている人は、どんなことをしても投げられたロープをつかもうとするものです。だから、人には絶望する勇気が必要なのです。自分の力ではどうすることもできないと知るなら、救い主を受け入れるしかない

からです。

「目が見える者」とは、自分を強いと思っている人のことです。神がいなくても生きていけると思っているのです。だから、人の言葉に腹を立てます。自分を強く見せて神を見ようとしません。そのことをイエス様は「盲目」と言われました。イエス様は、これらのことをはっきりさせるために、この世に来られました。

「パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」(ヨハネ 9:40-41)

イエス様は、「あなたがたが本当に心貧しい者だったら罪はなかったでしょう。しかし、あなたたちは『自分は見える』と言っているから、罪は残ります」とおっしゃいました。私たちが問われるのは、イエス・キリストを信じるか信じないかです。パリサイ人は信じませんでしたが、盲目だった彼は信じました。そして、神を礼拝しました。

「クリスマス」という言葉は、「キリストの礼拝」を意味します。私たちにとってクリスマスとは、目が見えなかったのに見えるようになった日のことです。イエス様を見て、この方こそ救い主キリストだと信じた日が、私たちにとってのクリスマスです。真のクリスマスとは、私たちがイエス様を救い主と知り、イエス様を信じ、礼拝することができることです。

神様が本当にいやしたいのは、からだのいやしではなく、心のいやしです。自分の真実な姿を知り、信じることができれば、人の言葉に動揺しなくなります。そのスタートはイエス様を信じることです。そのためにイエス様はこの地上に来られたのです。これこそ、闇の中に光が輝いたできごとです。

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:1-5)

これがクリスマスです。私たちの心の闇に光が輝いたのです。この闇を明らかにするためにイエス様は来られたのです。本当のクリスマスは、一人一人が、イエスがキリストであると信じられることです。それは、あなたが神の呼びかけに応答し、目が開かれたことを表しています。